

若越郷土研究

44の1

グリフィスとその時代

一九一〇～二〇年代の日本と米国

山下 英 一

一 排日移民法

日米関係の歴史のなかで、米国における日本人移民排斥の動きについて知ることは興味がある。とくに一九〇七（明治四〇）年、移民に關して日米間に交渉が開始されたが、一九一三（大正二）年に日本人移民排斥は世論の高まるところとなり、遂に一九二四（大正一三）年、排日移民法の成立となった。米国における外国人の移民制限は、日本人に限らず、とくに宗教上の見地から大量移民のロシア系、東欧系ユダヤ人に向けられてきた。

山下 グリフィスとその時代

この排日移民法の成立について、一九九八年七月一七日の朝日新聞文化欄にこの法律が「大統領選めぐる妥協の産物」であったという興味深い論説が載った。筆者は排日移民法の研究者、箕原俊洋氏（一九七一年生）である。以下箕原氏の文章に教わる。一九二一年（大正一〇）年成立の移民制限法に代る移民法の審議が二四年の米国連邦議会で行われた。

論点の一つは、黄色人種で唯一排斥を免れてきた日本人移民の扱いであった。人種主義の機運は強く、下院において排日移民法は難なく可決された。しかし伝統的に国際関係を重んじる上院では、日米関係を損ないかねない排日移民法への支持は低く、日米の世論も上院の良識ある行動を信じていた。

上院における日本人移民排斥の強い勢力はカリフォルニア州を中心とした西部諸州からの議員のみであった。折しも埴原正直駐米大使の日米友好を呼びかける書簡が上院に回付されるや、その結びの字句をとりあげた共和党

員で上院の外交委員長の一言が排日支持の扇動にまわった。というのが成立の通説となっていた。箕原氏はこれには何か裏があるとの疑念を持って資料を探した結果、排日移民法は連邦議員が国内政治上の必要性を優先したために生まれたことを知った。すなわち、共和党が再び大統領選に勝利するために西部諸州の共和党議員との和解と党の結束が必要であった。上院外交委員長の一言はそれを正当化する口実であったという。ということであれば正当化の口実になるなら何を言ってもよかったのである。

この法案の成立は、日本における親米派・自由主義者・国際協調主義者を幻滅させた。

排日移民法の成立は、日米関係を瞬時に崩壊させなかったものの、太平洋戦争へとつながる複雑な相互作用の中で、根深く無視しがたい一要因をなしたのである。

以上が箕原氏の新説の要点である。幻滅したのは日本において清沢冽や新渡戸稻造のような日米両国の友情を大切に思う親米派だけで

はなかった。米国における親日派も同じ気持であった。その一人にウイリアム・エリオット・グリフィスがいた。本論ではグリフィスがこういう事態に、いかなる *words and deeds* でその良心を捧げようとしたかについて考える。ここに云う *words* とは主として著作を、*deeds* とは主として講演を意味する。一八七二（明治四）年、グリフィスが福井藩々校の教師に就任してから、一九二七（昭和二年）の福井再訪までの五六年にわたる日本志向に三つの時期があった。最初は日本認識（*Recognition*）の時代で、その代表的著作が『*The Mikado's Empire*』（1876）。次が日清、日露の戦いで世界に示した日本発展（*Evolution*）の時代で、その代表作が『*The Japanese Nation in Evolution*』（1907）。そして三期目は日米和解（*Reconciliation*）の重要性を説く時代で、その代表作が『*Millard Fillmore*』（1915）である。忘れてならないのはこれらの *words and deeds* はすべてグリフィスの良心（*conscience*）の命じるところであった。もっともこのことは特筆すべきことだが、特別視することは少しもない。その

良心は米国人の精神形成の骨格となったピューリタニズムの信仰に由っていた。米国に渡ったピューリタンは、英国国教会から弾圧を受けたカルヴィン派のプロテスタントであった。いろいろな派の教会があったがフィラデルフィア生れのグリフィスはカルヴィンの影響を受けたオランダ系の改革派教会に所属していた。

以上のような点に立脚してみると、日露講和条約調印（一九〇五年）の二年後に出版された『*The Japanese Nation in Evolution*』の持つ意味は大きい。かつて私は「日露戦争と日本精神」の題で次のような文章を書いた。（『グリフィスと日本』三四三頁）

日本が優れた艦隊を率いる露国に勝利を収めた背後には大和魂、武士道精神があった。そのことを日本人の書いたものから知らされた西洋人は、そういう人種の起源は何処かについて関心をもった。それを基に日本の進化、発展の歴史をたどりその前途に期待するものは何かについて書かれたものが、当時の日本についての英書の主流を占めた。

そして日露戦争と日本精神を表裏一体なものとして考える傾向が風潮になっていった。国家という意識が強まり、大日本の呼称が現れて、内外ともに日本国の進歩とその精神の有様をテーマにした書きものが続出する。

この背景には日清・日露の戦いで西洋に見せつけた日本の脅威が生んだ黄禍論があった。グリフィスの著書はむしろこの論にたいして日本を擁護する考えで書かれているが、ここでは本論で重要と思われる内容について二つの意見を述べておきたい。

その一つは、二十世紀になって日本の最大の危険は軍隊がその原因になると指摘する。軍隊が「必要」「危険」「海の向こうに日本の栄光」を口実に日本の神聖な象徴の如く剣を振り上げるかも知れない。せっかく賢明で建設的な政治的手腕、国民の現実の要求に対する深い認識、そして人生の価値といったものによって日本が永遠に偉大で揺るぎない国になろうとしている時なのにと危ぶむ。もう一つの意見として、世界に冠たる国になるために必要なものは、①十二分な個人の自由②人

間性の価値の深い認識③とりわけ非人格的律法よりもさらに高く存在する絶対者の明確な理解といった三つのものに満ちあふれた文明である。これに反して、日本人が①共同社会の文明②人格の不完全な認識③万物に広く行きわたる一神教の認識不足のまゝではとうていさきほどの文明に太刀打ちができないというのだ。しかしグリフィスはここで何も西洋文明を絶対視して、日本がそれに倣うよう強要するようなことは言っていない。絶対者とか一神教という言葉はキリスト教の神を意味した。グリフィス自身はその神への信仰のもとで真の個人の自由と人間性の豊かな発露があると信じている人であった。キリスト教徒としてこの頃、グリフィスには、聖書に現われたキリストの人格について語った『*The Call of Jesus to Joy*』(1912)、聖書を通して信仰と健康について述べて、進歩の美名に汚される文明を論じた『*The House We Live In*』(1914)の著作がある。これらの著作については次の機会に述べることにするが、聖書の言葉を誠実に受け取る人の文章は、偏見がなく読んで非常に新鮮である。

山下 グリフィスとその時代

そういう人なればこそ単に歴史上の事実のみ金科玉条とする歴史でなく、あつてほしい人間性とは何かを信条とする人間の歴史を書く人であった。冒頭で述べた排日移民法成立に関する連邦議会上院での新しい事実をグリフィスは知っていたかは分らないが、その晩年は、この日米関係の和解に向けて努力と精力を傾けて著作に専念し、遠く講演の旅へ出向いて行った。

二 フィルモア大統領の親書

一九〇五(明治三八)年、日露戦争終結のためのポーツマス条約の調印が行われた。その年の十二月十五日、バッファロー歴史協会(米国ニューヨーク州バッファロー市)の席上、グリフィスは十三代米国大統領ミラード・フィルモア(一八〇〇―一七四、在位一八五〇―一五三)について演説をして、フィルモアを世界的視野で再評価した。『*Millard Fillmore and His Part in the Opening of Japan*』丸太小屋の生活から身を起し、国家的名声と世界的支配力を得るまでになったこの典型的米国人の少年時代の蔵書は聖書、曆、『天路歷程』に過ぎなかった。毛織物仕

上げ工の徒弟になり、この年季奉公から借りた金を法律の勉強にあてた。二三歳の時、バッファローに移り弁護士資格を得た。ホイッグ党に入り、ニューヨーク州選出の下院議員になり、歳入財源委員長として下院のリーダーであった。一八四八年、ホイッグ党公認候補の副大統領、一八五〇年、大統領になった。在任中の国会で最も大きな論争は奴隷制の賛否だったが、フィルモアは *Fugitive Slave Act* を含む妥協案を実施した。ホイッグ党が奴隷制度問題で分裂したためバッファローの私生活にもどったフィルモアは、市の発展のために多くの制度の創設、計画の援助に参加したり、歴史協会、総合病院、大学建設の発起人になった。このようにフィルモアの経歴を話したあと、日本の開国にのぞんでその重要な役割を担った人物としての本題に入った。ペリーの日本遠征に至った根拠が主として米国捕鯨船の日本近海における難破とその遭難者の保護にあつたことの経過から始めた。フィルモアの証言によると、「半世紀前の日本の牢獄のひどい状態、難破した囚人に対する残酷な行為のことを知っていた。

そのためペリー遠征の決定は閣議の満場一致で可決された。そこでフィルモアはペリーを選び、必要な戦力を確保し、日本皇帝への親書に署名した。蒸気船、フリゲート艦八隻、二二〇門の大砲、石炭船、輸送船、搭乗員二千。そして攻撃されなければ暴力を使つてはならない。しかし攻撃されれば力でもって、油断のない島の住人に、彼等の相手は市民を守るに相応しい政府であることを確信させる権限をペリーは有していた。グリフィスはこのことを強調した上で以下のように演説を結んだ。「日本及び米国の歴史学者の立場から、日本遠征成功の榮譽はペリーと同じくフィルモアにもあると信じて疑いません。ポーツマス条約のこの年にあたり、フィルモアの名を新しく過去の榮冠で飾り、未来において何かより良い方法が見つかるまで、日本と米国は共に戦争回避のための最善の道をワシントンとフィルモアの教えに従つて進むよう銘記しようではありませんか。」

この演説から十年後の一九一五年、グリフィスは満を持して『フィルモア伝』を上梓する。

(“Millard Fillmore—Constructive Statesman,

Defender of the Constitution, President of the United States”) 演説においては「フィルモアの親書が目的とする「友誼、通商、石炭及び食糧の補給、遭難者の保護」のうち、「遭難者の保護」が強調されていた。しかし『フィルモア伝』では「友誼」(friendship)が力説されている。ペリーが実質上、日本を開国したというのは米国人が一般に持つ迷信で、うぬづれも甚だしい。ペリーは電氣のボタンに触つて、なかの機械を動かしたままで日本人の内部に芽生えた知力が前以て準備されていなかったら、ペリーは不首尾に終わったであろうという。蘭学者らの殉死が日本を文明国と同等の高さにまであげることにつながり、実際にペリーの成功の立役者になった。米国の側から見ると、日本遠征の要因は、鯨、石炭、漂流民の帰還、水夫の救助、通商、キリスト教、米国の考えを広めたいという願ひにあった。何にも増して日本遠征の背景にキリスト教徒、つまり米国民の祈願があったという。

交易のもたらしたものの一つに、米国人の

日本人に対する感情が変つた。「黄色い猿」と呼ばれる人類学上の珍奇な動物でなく、あらゆる尊敬に値する文明に育ち、ロシアを卑しめることのできる人間だと分かつたのだ。しかしこれはグリフィスの誇張でもなければ、作り話でもない。ところが二十世紀になって、この穩健で勤勉な日本人を米国から締めだしたり、兄弟の縁を結ぼうとする日本人を拒絶するようになった。亜細亜人種蔑視に抗して、反対に亜細亜を知らなければと同国人に謙虚に訴える。

白人は今や自惚の王位を降りて、亜細亜の有色人種が知力に於いて、白人と同一だという主張について考えてみる必要がある。インディアンや黒人のような被征服者や奴隷の経験によつて増長された米国人は亜細亜人種を劣等と考へてあたりまえのつもりで来た。今や、その国から来た人種から考へ、学び、歴史を読み、多くの未知のことに精通せざるを得なくなつた。怒号も自惚もこの事実を目を覆うことは出来ない。

『フィルモア伝』は今から八五年前に同時代の米国人に語りかけた覚醒の一冊であった。それはフィルモア大統領がペリーに預けた親書の精神、とくに友誼の覚醒へのグリフィスの諫言の書であった。

では『フィルモア伝』の日本に於ける反応はというと、今のところ目立った記録は入手できない。唯一、富山房発行の雑誌「學生」にうれしい記事が載った。「學生」は一九一〇（明治四三）年創刊、一九一八（大正七）

年休刊まで続いた中学生対象の教養雑誌であった。その第六巻第六号、一九一五（大正四）年の表紙に「世界的文豪グリフィス博士の寄稿あり」の文字があり、*To My Young Friend in Japan*、「日本の青年諸君に与ふ」

の記事が入っている。その英文に意訳、註釈、著者紹介をしたのが西村酔夢であった。西村は「學生」の編輯主任で、本名を真次といった。一八七九（明治一二）年、三重県宇治山田市生れ、早稲田大学で国語漢文及英文学を学び、日露戦で輜重兵として応召、東京朝日新聞記者を経て富山房に入社した。その後、早稲田大学で文学、人類学、経済史、科学史

と多才を發揮した教授をして、一九四三（昭和一八）年に亡くなった。そのグリフィスの寄稿の号に西村酔夢による「開国の暁鐘」という文章がある。これが『フィルモア伝』

の感想文で、西村は原本をグリフィスから贈られていた。西村がグリフィスを知ったのは、

おそらく「學生」の賛助会員にグリフィスと面識のある人がいたからであろう。手島精一（東京高等工業校長）、小村寿太郎（公爵）、

島田三郎（衆議院議院、芳賀矢一（文学博士）、渋沢栄一（男爵）、新渡戸稲造（農学博士、法学博士）の面々である。

西村はまずフィルモアの親書の友誼の部分
をグリフィスが引用して、大統領のこの誠実な言葉を思い出すがいと述べたことに共感を
おぼえて云う、「まことに意味の深いお言葉で、排日の行為に出づる貴国の人々も、反
米的感情を持てる我が国人も、此の国書の文
句を味いましたならば、恐らく腋の下から冷
汗が出ることも御座いませう。」また白人
が自惚の座を降りて、亜細亜の有色人種が
知力に於いて、白人と同一である云々をグリ
フィスの同情ある観察と見て云う。「先生の

ような具眼者が少くとも一万人一いや一千人でもあったなら、顔の黄色い私達の同胞は、
貴国の西部で今日のような浮目を見まいと思
います。」西村酔夢のこのような文章からも、
排日への遺恨と『フィルモア伝』の的確な理
解が読みとれよう。

ここに一通のグリフィスからの書簡がある。原文がないので訳文のまゝでしか読めないのが残念だが、『フィルモア伝』出版後の同年六月八日付でニューヨーク州イサカの住居から送られていた。「ジャパンス、メッセージ、ツ、アメリカ」の正岡猶一という編者の求めに
に応じて書かれた文章だということ以外には分らない。しかし「日米両国民の間に猜疑と敵意とを生ずる理由に關して、予の意見を率直に吐露すべし」とあるように、齒に衣着せない内容なので、それを簡条に記してみよう。

一、日本国民の改革すべきこと。

イ、外人殊に米人を模倣して、富を誇る勿れ。

ロ、陸海軍を誇る勿れ。

ハ、自信自立の風を養成し、個人の人格

を向上せしめよ。

ニ、日本を世界に開放して現代文明と接触せしめたる功労者ミラード、フキルモアを正しく認識せよ。

ホ、吾人の文明の偉大なる建設者たる耶蘇は、僧侶閥や宗教上の階級や政權とは交渉せずして其福音は殆ど全く個人に関せり。横井小楠と中村正直とは夙に之れを理解せり。

ヘ、総ての事に正直なれ、諸氏は余りに、非開放的也。

ト、法律に於て、社会に於て、結婚生活に於て、婦人を一層好く遇せよ。

チ、武士道を浄化して其不純分子を去れよ、耶蘇の教理を標準として之れを向上せしめよ。

二、米国社会の欠点と罪惡と痴愚と疾患。予は米国民の低劣なる道徳、物質主義、社会上及び政治上の悶着、頑冥なる偏見、人種の憎惡、拜金主義、及び有らゆる不正を悲む。

原点という考え方からすれば、ペリーによ

る日本の開国は日米関係の原点であった。グ

リフィスは悪化する日米関係を原点の精神に帰れと繰り返し主張した。その精神とは親書にもられたフィルモア大統領の友誼に外ならない。これはグリフィスが日本の歴史をふり

返つて、着眼した現状打開の到達点であった。はたしてそれが説得力のある主張であったか、またその影響力については実証に乏しい。しかし日本の歴史研究者として、またキリスト教徒としての良心の自由の立場からも、個人に出来る精一杯の試みであったことは疑う余地はない。かくして『フィルモア伝』出版以來、十年の歳月を待つて、グリフィスは約六

カ月の日米親善の旅に太平洋を渡つた。

三 福井再訪の日々（一九二七年、昭和二年、四月二五日から同二九日まで。資料。グリフィス日記、福井日報、福井新聞。）

四月二五日（月曜）。グリフィス夫妻（グリフィス八三歳。夫人（五九歳。）の乗った列車が午後六時二分に武

生駅に着く。武生中学の生徒がホームにだれ込み、日米国旗を振って歓迎。最後部二等車のグリフィスの席には永井福井市長、通訳

の岡島牧師、熊谷議長、佐々木福井師範学

校々長、大島福井中学校校長、通訳の斎藤静福井中学英語担任教諭、グリフィスの教え子の並木立彌、勝山千百里が次々に飛び込み歓迎の握手。武生駅で乗込んだこれら出迎えの人

のなかに七〇歳の老婆がいた。五六年前、福井藩校明新館の教師グリフィスの召使であつた佐平夫婦の赤ん坊の子守をしていた女中の著『The Mikado's Empire』のなかで『O-Bun』のことを愛情をこめて書いた。

おふんという佐平の男の子のお守りをする女中のことを忘れてはならない。赤ん坊をだっこしたり、おむつを変えたり、おんぶしたりする。年は十一で、やせていて、弱

そうで、悲しそうな顔をした子供であつた。やさしい言葉をかけてやると、しばんだ花に雨がかったように元気になった。おふんは外国人は恐ろしいという話を聞いていて、それを信じていたらしい。そのためびくびくして、こわいのを押えて先生に挨拶に来たが、一日一日となれてきて、食事の世

話をするうちに数週間たち、恐怖心がとれ
てきた。それでも悲しそうな目をした夢見
がちな子供で、いつもじつとまじめな様子
で花をのぞきこんだり、青い空や遠い山を
じつと眺めていたり、夜の星を見つめてい
たりした。おぶんにはつらい生活の経験が
あった。母親はおぶんを産み落として死ん
でしまった。孤児になったおぶんは乳母や
親類に転々とあずけられて、やがて大きく
なって佐平の女中になり、食べ物と着物を
もらって赤ん坊の世話をするようになった。

グリフィスは思いがけなく、この不幸な身の上のお文が、福井に向う列車のなかで迎えてくれてよほどうれしかったにちがいない。日記に「O-Bun」が二度登場する。お文とグリフィスの再会を目撃く記事にした「福井日報」によると、砂子田文、足羽郡和田村勝見に生れ、当時は福井市手寄中町に県庁に勤める養子と任んでいた。鯖江駅から教子子の今立吐酔が乗る（七十二歳）。鯖江の在にある実家の満願寺から出て来た。今立吐酔については拙文「今立吐酔とグリフィス」（『若狭郷土

研究』第三四巻二号に詳しい）。列車が大土呂を過ぎてから、真向に雪をいたいだいた白山を見て興ふん、豊橋鉄橋にくると足羽川を眺めて思いにふける。一八七一（明治四）年三月に初めて目にして以来のなつかしい風景であった。列車は六時三二分、福井駅着。グリフィス夫妻は松平康莊侯と握手。村松福井駅長の案内で駅長室へ。少憩後、福中生による米国々歌の合唱が聞えて、永井市長、大島福中校長の先導で、グリフィス夫妻が駅頭に姿をあらわし、市村知事の令嬢から花環を受ける。出迎えの役人はその外に関高等工業学校

長、内藤裁判所長、川副検事正、赤松警察部長、市会議員であった。駅前から大名町四辻に至る一マイルの大通りは紙製の日米国旗を手にした生徒、児童が駅前の日本国旗が交叉するアーチに向って整列している。駅前南側に福井師範、農林、北中、福井実女、以下小学校、附属、旭、豊、足羽、足羽西、花月、乾。駅前北側に福中、高工、福工、福高女、仁愛高女、福商、以下小学校、進放、宝永、春山、順化、福高小。沿道を埋めた一万人以上の人垣のなか、歓声に送られてグリフィス夫妻らを乗せた三台の自動車の名和屋旅館へと向った。その夜、福井市総合青年団主催の提灯行列が午後七時半に旧県庁舎跡の広場を出發した。団員約五〇〇名は、田中副団長を先頭に人山を築く本町通り、市役所前、浜町通りを経て幸橋に出ると、名和屋旅館対岸の足羽河原でグリフィス万才を三唱して、午後八時半に解散した。実はこれには裏話があった。グリフィス来福は予定では四月十七日だったが八日間の延期になった。その通知が一片の手紙であったのにグリフィスの誠意を疑った市総合青年団は歓迎を一切取止める決意をした。こういう一幕もあった。散会后、各青年団総合幹部八名と田中団長を旅館に招いて、感謝の意を表し、帰米したら「五十年後の福井」について執筆の予定を述べた。旅館で永井市長、大島福中校長、並木立彌ら数名と夕食。旅館前の風琴亭を訪ねてさらに懐旧談にふけた。風琴亭は、外国人住宅を改造した洋食屋である。しかしグリフィスの家は明治六年二月に焼失していて、別に福井藩が外国人医師を雇い入れるために建てた住宅が残っていた。それが焼けた跡地に移されて、

明治三十三年、風琴亭になった。

四月二十六日（火曜）。晴。

県より差回しの自動車で午前十時、市役所を訪問して、永井市長から昔グリフィスが滞在中に使用の鋼鉄製の椅子や洋食皿の案内を受ける。市議員一同にグリフィスの見た明治初年の福井の状況を語った。十時四〇分、県庁を訪れて、市村知事と会見した。永井市長、グリフィスの生徒で工学博士佐々木忠次郎、今立吐酔ら同行。県よりの土産品として、若狭塗文庫の贈呈。河合県視学が若狭塗を説明した。午前十一時、福井中学校を訪問。校長室で水晶学者、市川新松氏から水晶標本の説明を聞く。グリフィスが授業で使った地球儀などを見る。全校生徒、職員、及び新会員の歓迎式に臨む。米国歌の合唱に迎えられたグリフィスは、大島校長の歓迎文朗読（斎藤英語教諭の英訳）のあと、三〇分の講演を行った。その内容の一部を福井新聞は

「人類平和の為にはお互の理解が大切」の見出しで次のように伝えた。

世界の人類が互に相争う事の起るのには良く

お互に知り合わないからだと思えます。お互に偽をいう事が遂には大きな事実となるものです。アメリカでも日本の事を悪くいうものはないではありません。私が五十年前、日本へ来て然も福井にきた際も福井はアメリカ人は化物の様に宣伝されていたためか私の食事する所を垣根の外からのぞきこんだ事もありました。

明新会主催の午餐会、記念撮影のあと、旅館へもどって三〇分の仮眠をとる。午後一時半、泉邸（池、庭、石の上の亀と日記に書く）で昔の福井の生徒十数人（七〇歳以上）の歓迎を受ける。その一人は昔の学校でのいろんなエピソードを読んで聞かせた。講義室や実験室の火事で焼けずに残ったなつかしい私物を見た。学校のあった所に県庁が立つ。談笑と懐古にすぎた。午後三時半、松平康荘侯爵邸訪問。グリフィスは侯爵の幼年時代を知っていた。*The Mikados's Empire*、第二部第八章「大名の歓迎―私の学生たち」のなかに「小さい大名」の木版画とその記事がある。

好きになった人のなかに大名の息子がいた。元氣なよく笑う子で、四、五歳ぐらい、ひらめきのある目をしたおもしろい子で、アメリカの子供に負けないくらい快活である。この松平の息子は金の柄の小刀を差していた。太刀持ちの十三歳の若者がそばについて、長い方の刀を持っていた。息子の頭は剃ってあったが、帽子のように円い部分が残っており、そこからちっぽけな鬢が飛び出していた。その父親からもらった写真からの木版画でわずかにわかることは、非常にきめの細かい、つやつやした健康そうな栗色の皮膚、さらさらした黒い目、ばら色の頬をしていて、茶目気があり、さぞかしその母は世界で一番美しい子供を産んだと思うだろう。私はその子に福井で、後に東京でもよく会ったが、アメリカで教育を受けることになっている。

夕食七時半。三人（グリフィス夫妻と他に誰か一人、吐酔か）で映画に行く。長い期間のかかった末の残忍な殺人劇と忠義。お湯に入って寝た。映画は松竹館上映の時代劇百々之

助主演の血櫻前篇であった。

四月二十七日（水曜）。晴。

八時半から市内視察で精練会社、橋本左内の墓（この偉人のファン、日本人の財産）、新田義貞の遺跡藤島神社、足羽山招魂社を訪れた。午前十一時、県会議事堂で行われた米国から平和の使節として送られた青い目の人形の伝達式に出席した。水原学務部長の開会の辞のあと市村知事から次のような挨拶があった（福井新聞）。

お待ちかねのアメリカ人形をお渡しする先にアメリカで日米の親善をするために世界児童親善会を造り米国の児童の親しみを伝える使いとして多数の人形を日本へ送られたが内本県幼稚園小学校へ百五十個配分された米国の児童手ずから衣服を縫て手紙をかき旅券まで付して盛んな送別会までして贈られたのであるから皆さんもその意を受けて夫々歓迎会を催されたい。

次いで知事令嬢とし子さんから代表者の森貴族院議員の令嬢文子さんに人形が渡された。

山下 グリフィスとその時代

最後にグリフィスの挨拶（今立吐酔の通訳）。

このなかで日下部太郎のことにふれて、アメリカ留学中の彼から福井のことを井戸のなかに福があるという意味と聞いたことを憶えていると話し、福井に日下部の記念碑を立てるときいたのでその費用の一部にといささかだが寄付したといった。式は児童らの歌う「人形歓迎歌」の合唱で閉じた。この歌はアメリカ人形の受渡式で歌われるのに作られた。

(Words: D. lit. T. Tanka, Music: Tokio academy of music)

うみのあちらのともだちの
まことのこころのこもつて
かわいかわいになぎよさん
あなたをみんなでむかえます
なみをはるばるわたりきて
ここまでおいでのになぎよさん
さびしいようにはいたせません
おくにのつもりでいらっしやい

かおもこころもおんなしに
やさしいあなたをたれがまあ
ほんとのいもうとおとうとと

おもわぬものがありましたよ

ちなみに二九日（天長節）に尾上幼稚園で母の会と合同で開催された青い目人形歓迎会のプログラムを記す。開会の辞、米国の歌、日本の国歌、「お人形大使に代つて」、青い目のお人形さん、唱歌「人形」、遊戯「赤ちゃんの病氣」、ダンス「たのしくけふ」、遊戯「桃太郎さん」、琴曲「ホトトギス」、唱歌「海をはるばる」、遊戯唱歌「ひなまつり」、遊戯「日の丸のはた」、唱歌「人形を迎える歌」。

福井総合婦人団の歓迎会が十一時半から福井高等女学校の講堂で開催された。婦人団代表者三十余名、正門の外に整列して米国々旗を振った福井高女職員生徒、実科高女職員生徒千五百余名の盛大な拍手に迎えられる。高女三、四年の米国々歌の合唱、つづいて婦人団を代表して林貞子女史の祝辞の朗読、森初恵女子の記念品贈呈（黒い柿の木材で作った二体の像）があった。午餐会。グリフィス夫人の演説（三〇分）と米国婦人歌の高唱。グリフィスもまた日本に最初の女子教育を施行したのは姉マーガレットで、これには田中不二

磨の応援があつたこと、また日本の婦人教育の発達は皇后陛下のこれに対する熱誠のたまものであると述べた。千人からの女学生の見送りを受けて午後一時、会場をあとにする。

次の講演会場である加賀屋座へと向つた。二時間演の会場は一般公開とあつて、二三〇名の婦人を交えて階上階下共に約八百名(福井日報、数百名が福井新聞)の聴衆で満員になつた。永井市長よりグリフィスの略歴紹介があつて、グリフィスの講演が始つた(今立吐酔の通訳)。福井新聞は「言を盡して国体を礼賛」の見出しを、福井日報は「日米親善を力説した」の見出しのもとに内容の一部を次のように伝えている。

日本は五箇条の御誓文に依り新智識を輸入すべく明治四年から三十年までの間に外国の教師を招聘した事は三千余人であつたが自分は其うちでも最も古い。今も高女校で講演をしたが日本の女子教育の著しく進歩した事は国のため最も賀す可きことで自分もたのもしく感じている。又福井が日となく夜となく誠意をこめて私共を歓迎して下

さる事は感謝するに其言葉もないが之が日米の交驩を益々親善ならしむるもので丁度此前に吊られてある両国の国旗の如く其風の吹き方に依りて方向を共にする如く如何なる悪いものが出て宣伝しても此兩國はいつ迄も相提携せん事を望む。

聴衆は総立となつてグリフィス夫妻の万歳を三唱して閉会した。いったん旅館にもどつて仮眠した。そして午後四時からの県市聯合官民合同の歓迎会会場である足羽山三段広場のテントへと移る。「来会者官民八百二十余名(福井新聞の見出し)。会員は正面の講壇に向つて十三列に整列した。音楽隊による米國々歌の合奏。一同着席。まず市村知事、永井市長の歓迎の辞があつた。永井市長のことばのなかにグリフィス夫妻に記念品の贈呈について述べた所がある。「此品は軽微なりと雖ども本市の産物たる絹織物を特に選定してその染織裁縫共に親しく市民の手に成りしもの(福井新聞)。羽織と袴の和服一そろいがそれであつた。これに應えてグリフィスは世界の大勢を論じて曰く(岡島の通訳)。「日本は東

亜における覇者として起ち亜米利加は歐洲列強の首班として太平洋の彼方に隆盛を見る事と信んずる東西兩國が太平洋を真中にして一層の親善を図る事は世界平和の上に幾多の貢献をする事と思われ云々(福井新聞)。夫妻はそれぞれ記念のため月桂樹と落葉松を植樹して茶話会に入り、君が代合唱後万歳を三唱して五時十分散会した。午後五時、福井市を代表して熊谷市会議長はグリフィス夫妻を市内の料亭五岳楼に招待した。その時夫妻は市長から贈られた和服を着用した。その時の和服姿のグリフィス夫妻の写真が福井市立郷土歴史博物館に所蔵されている。教子たちも同席して、芸者の歌と踊りがあつた。福井名物の素囃を見て、テーブル掛けとハンカチーフの記念品が贈られた。

四月二八日。(木曜)。

午前七時起床、永井市長の訪問。付近を散歩。十時三五分旅館を自動車で出発、福井高等工業学校到着。関校長の案内。講堂で折戸教授の通訳でグリフィスの講話。十一時二〇分、同校から織物組合事務所へ向つた。同三〇分到着、松井組長の案内で、階上に陳列し

てある各種織物を視る。貴賓室のグリフィスがお茶をことわり水を飲んで大喜びと福井日報の見出しにある。正午過ぎ事務所を出て福井中学に立寄ってから師範学校に向う。学校の門前には同校生徒、女子部一同が日米国旗を振って歓迎。佐々木校長の挨拶とグリフィスの講演。講堂で女子部生徒の手料理を共にした。同校校庭に銀杏の記念樹をグリフィスの手によって植樹して午後二時散会した。午後二時一〇分、市内学生のための県市合同主催の講演会に出席。来聴者は商業生徒五百名、高等小学生徒三百名、北中生徒八百名、農業生徒三百名、工業生徒二百五十名、各学校職員約五十名、合計二千二百名。楠北中学校長の発会の辞があり、折戸福工教授の通訳でグリフィスの講演が始る。「私は諸君に忠告したいことがある」として云う。(福井新聞)

第一食過ぎをするな、第二酒を飲むな、第三煙草をやめよ、第四よく眠れ、第五頭の修養に努めよ、第六読み書きに勉め書籍の内容をえらべ、第七自分の健全な良心を養い人を害するようなことをしてはならぬ、

山下 グリフィスとその時代

第八凡ての人に対し兄弟の如くあれ、第九悪友をさげよ、第十凡ての学校で各自が立派な学者になるよう努め常に良心を鍛え悪に染まぬよう自粛せよ。

さらに「信仰によって身体精神共に勇敢になり、天皇には忠義を尽し政府に忠実を旨とし民間に徳義を重んじ善良なる人民となりて国歌のために盡されんことを切望する」と述べて終ったという。今立吐酔の通訳でグリフィス夫人の挨拶があり、楠校長の謝辞、グリフィス万歳を三唱して三時二〇分ごろ散会した。一旦旅館に引揚げて休んでから自動車で旅館を出て、四時五〇分、江戸町のホームス宅に到着。火曜俱樂部有志主催の夕食会に出席する。グリフィス日記によるとホームズ氏はカナダ人の牧師であり、火曜俱樂部が木曜俱樂部になつていて、社会生活の向上と改善のため、の会、芸者は入れないとある。(Holmes, Rev. C. P. United Church of Canada) 七時半から同所で開かれた茶話会にのぞみ、八時、名和屋旅館に帰る。

四月二十九日。(金曜)。

記念品や荷物をまとめて下におろすと、一八七一年のなつかしい家を見つけてくれた吐酔とそこを訪ねた。その家は福井藩が建てた外国人教師の家にグリフィスが入居(同年九月二五日)するまで住んでいた福井藩家老酒井温の屋敷であった。家や庭やその附近の写真をとった。福井駅に向う。一マイル以上の沿道にはおそらく一万人の生徒が整列して、日米国旗を振って見送ってくれた。列車で敦賀へ向う。途中、武生の駅で教え子の一人と武生中学校生徒の米国々旗に見送られる。午後零時八分敦賀着。後藤町長を始め官民有志外二千余の小学生徒に出迎えられ、町から差回しの自動車で万象閣に入り、午餐会(来賓五〇名)に出席した。敦賀町より若狭塗の贈呈があった。椅子に坐つて敦賀湾を見下して(一八七一年の時のように)、朝鮮のために祈った。グリフィス夫妻は先月二二日から四月一八日にかけて朝鮮、満州の各地を旅して来た。午後一時、南小学校で敦商、敦賀高女、上級小学生に講演をする。歩いて気比神宮へ行く。神道の儀式。車で金ヶ崎宮に参拝。停泊中の商船から満州の大豆の荷をおろしてい

た。税関を視察した。大勢の人に見送られて、午後五時六分発の列車で京都に向った。日記によると「越前よさようなら」。ちなみに敦賀町では青い目の人形を一般人に公開するため、グリフィスの講演した南小学校の講堂に陳列することになった。人形は市内三小学校から三個、サミドリ、及びメソジストの両幼稚園から二個であった。

四 ハリスの記念碑

一九二六（大正一四）年、十二月十三日、横浜に上陸したグリフィス夫妻は、九州、朝鮮、満州、高松、岡山、福井、京都、大阪、名古屋、函館、札幌、仙台、東京などで一日平均五、六回の講演の旅をして、一九二七（昭和二年、六月十一日、横浜から帰国の途についた。この間の日々の記録については稿を改めざるを得ないが、福井に限ってみても、グリフィスの講演の対象は日本の青年男女にあつたといえよう。福井滞在中の行事のことはあらかし二種類の新聞で報じられていた。しかしグリフィスの日記でしか知られない記録にも興味をそそるものがあつた。カナダ人の牧師のところへ、火曜倶楽部という

「社会生活の向上と改善のための会」の茶話会に出席した。「芸者は入れない」といった感想はグリフィスの着眼である。また、敦賀湾を見下したとき、「朝鮮のために祈った」という言葉もグリフィスの良心に触れる思いがする。

雑誌「キング」（昭和二年、九月号）に、「懐しき日本を去るに臨みて」と題した講演が掲載された。そのなかでグリフィスが初めて日本に来たとき、横浜に日本在留の自国民保護のために英国や仏国の兵隊が駐屯している、米国の領事も同じようなことを提議したこと、にグリフィスは強く反対して実行を止まらせたという話が入っている。外国兵の駐留は「日本の国民を侮辱し、日本の政府に対する不信を露骨に表明するものだ」と主張したという。

のと考えておりましたから、領事の日本出兵には極力反対したのでございます。

と述べて、「日本の両国に力を盡した米国が、六十年後の今日、日本の強大を見るに至って却って、日本人排斥の拳に出でましたのはなんとしても相済みぬこと……」と云つたように書いていた。原文を読んでいないので、これらの文章に真偽のほどは知らないが、とにかくグリフィス再来日の年は日米両国で何らかの和解の道を求めて苦慮していた。日米親善大使の名の青い目の人形もその米国側の苦肉の策であつた。

日米双方の示した働きかけの一つが、伊豆下田柿崎の玉泉寺にハリス碑の建立であつた。タウンゼント・ハリス（一八〇四—一八七八）は、一八五六（安政三）年、八月二一日、米艦サン・ジャシント号にて、下田入港。下田奉行との間に、「下田条約」九ヶ条を締結した。十二月七日、江戸の將軍家定に謁見を許されるまで、ハリスは健康を害しながら任に耐えた。子爵渋沢栄一は駐日米國大使、エドガー・エー・バンクロットから建碑の相談を

御承知のタウンセント ハリスの如きは、幕府時代に日本にまいりましてさえ、單身自若として江戸に留まり、幕府の處置に甘んじ、日本人に信頼しておつたのでございます。私はこのハリスの態度を立派なものと

受け、日米交誼の由来を物語り、日米両国民の将来に感化を与えるものと理解して建立にごぎつけた。下田に領事旗を掲げた九月四日を記念して、一九二七年九月四日、除幕式が挙行された。これには日米協会々長公爵徳川家達とその会員の賛同を得ていた。記念碑表面にハリス総領事日記の一節が刻印されている。それはグリフィスの著した『ハリス伝』

(*"Townsend Harris: First American Envoy in Japan"* 351pp. 1895) からの引用であった。

その三カ月前にグリフィスは帰国して、式に参列できなかったのが惜しまれよう。

一九二七年という年は現在の日本人にとって決して遠い過去ではない。中野重治の「雨の降る品川駅」というプロレタリア詩が伏せ字だらけで発表されたのがその二年後に過ぎない。日本国民でグリフィスの声にも、中野の声にも耳を貸す者は少なかった。グリフィスの話を聞いた福井の青年は戦場で戦わなければならなかった。